

---

---

# 人格としての他者と他者問題の成立基盤

## ——フッサール現象学における「人格主義的態度」の検討——

The Concept of Person in Husserl's Phenomenology and the Problem of Other Minds

●  
吉田 聡  
情報科学部 准教授

●  
Akira YOSHIDA  
Faculty of Information and Computer Science,  
Associate Professor

●  
2014年9月19日受付

●  
Received : 19 September 2014

---

The problem of other minds is reconsidered through an examination of the concept of "Person" in Husserl's phenomenology. Although it may seem that the way of knowing one's own mind and the way of knowing other minds are very different, as a matter of fact, the two are mutually related. Husserl's argument clarifies this relation. Considering this relation, the source of the problem of other minds is revealed and dissolved.

キーワード : Husserl, Phenomenology, Person, Other Minds

---

### 序

他者の状態について語ることに、自己自身の状態について語ることに間には、いかなる相違があるのか。その相違は、他者と自己についての知のあり方を比較してみれば明白であるように思われる。例えば、私たちは他者の意識の状態を直接的に知ることはできないが、自己自身の意識の状態については直接的に熟知しているということが挙げられる。こうした自他の認識の非対称性は、他者の認識に関する哲学的問題を引き起こす。フッサールもまた一見すると、『デカルト的省察』などで展開される他者論において、このような問題設定のもとで議論を展開しているように見える。実際のところ、自己の領域から出発して感情移入による他者の構成を語るフッサールの他者論では、確かに自他の意識に関する認識の非対称性と、自己認識の優位性が、基本的には受け容れられているようにも見受けられる (cf. I, 124-130)。

こうした感情移入による他者把握という見方に対しては、例えばハイデガーの『存在と時間』における「感情移入」論の検討などに見られるように、これまで様々な批判的考察がなされてきた<sup>1)</sup>。しかし、もちろんフッサールの他者論は単純な感情移入論ではない。むしろ『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』第二卷 (以下『イデー II』と表記する) などにおけるフッサールの議論を参照す

ると、そこには自己から他者への心的状態の移入による他者理解といった図式を克服するような要素が含まれていることが分かる。だがそうした要素はフッサール自身の議論の中では十分に整理されているとは言えない。そこで本稿では、『イデー II』で展開される人間 (人格) の認識をめぐる分析を検討し、そこから導かれる諸見解をもとに自我の自己把握と他者把握との密接な連関を明確化しつつ、他者問題の成立基盤について考察する。

### 1. 自然主義的態度と人格主義的態度

『イデー II』での議論を手掛かりにして他者の問題を考察する際にまず着目すべきなのは、そこで強調されている「自然主義的態度 (naturalistische Einstellung)」と「人格主義的態度 (personalistische Einstellung)」との区別である。この区別は、「心 (Seele)」と「精神 (Geist)」との概念上の区別に関わっている。フッサールは両者を区別するが、その区別は自明なものではなく理解に困難を伴うことを認めている (cf. IV, 172)。ここでのフッサールの議論では、意識体験が自然主義的態度によって考察される場合には「心」と呼ばれ、人格主義的態度によって考察される場合には「精神」と呼ばれる。それではこの自然主義的態度と人格主義的態度との区別とはいかなるものなのか。

まず自然主義的態度とは、あらゆる対象を物的な自然に基づくものとして捉える態度のことである (cf. IV, 174). この態度のもとでは、心は物体としての身体に付属するものとして、そしてその身体は空間・時間的な世界の中に実在するものとして捉えられる。例えば猫を見るとき、猫は物的な身体を持つと同時に感覚する機能を備え、一種の心と呼ばれようようなものを持つものと見なされている (cf. IV, 175). そのようなものとして猫を見ることが一般的に言われる「猫を見る」という行為であるとフッサールは述べる (cf. IV, 175). その際に心は、物的な身体と並存するわけではないが、身体に付属するものとして、身体とともに動き、身体とともに空間・時間上に位置を持つものとして捉えられる (cf. IV, 176). すなわちこの態度のもとでは、「心は身体の中にあり、身体が今まさにあるところにある」(IV, 177) ことになる。心は、自然主義的態度による限り、このように「実在的な(実体的-因果的な)自然」(IV, 181) のうちに局在化され、捉えられる。この点は、人間に関しても同様である。自然主義的態度では、人間もまた「自然の客観」(IV, 183) と見なされ、自然科学的な探求の対象となる。この態度の中では、例えば苦痛、空腹、不眠、快楽、さらには怒りや喜びといった人間の感覚や心に関連する事象の原因は、因果的に捉えられた物的な自然の中に求められる。

だが、私たちは日常の中で、人間の身体を単なる物体と見なすような態度をとっているわけではない。私たちの日常的な態度とは、「共に生きる」「話し合う」「挨拶の握手を交わす」「愛と反感、心情と行動、発言と応答の中で互いに関係づけられている」(IV, 183) というような場合の態度であり、身の回りの世界を自然科学が対象とする客観的な自然ではなく「環境世界 (Umwelt)」(IV, 182), 「環境 (Umgebung)」(IV, 183) と見なす態度のことである。こうした態度を、フッサールは人格主義的態度と呼ぶ。

こうしたフッサールの記述から、人格主義的態度として考えられている態度は、人間に対する態度と、周囲の世界に対する態度という二点で自然主義的態度と区別されるべき特徴を持っていることが分かる。まず人格主義的態度とは、人間として他者と様々な仕方で交流する際に、私たちがとっている態度である。他者と話す、共に作業する、遊ぶ、他者の性格を知り好ましく思う、といったことを行うときにとる態度は、実際の生活の中で私たちが人間に対してとる態度であり、それは人間をも自然のうちに位置づけ、周囲の事物との因果関係を探求しようとする自然主義的態度とは異なっている。そして、このことと関連しているが、人格主義的態度は周囲の世界をいかなるものと見なすかという点においても自然主義的態度とは異なっている。自然主義的態度では私たちの周囲の事物が空間・時間の中に位置づけられる客観的な自然として把握されるのに対して、人格主義的態度ではそれらは「環境世界」、「環境」として把握される。この環境世界は私の体験の中で現れる世界、すなわち「私にとっての世界 (Welt "für mich")」(IV,

186) であり、自我の体験の移り変わりの中でその意味が形成されてくる世界である。

フッサールは、この人格主義的態度を、「知っている」(IV, 182) ということに基づく態度であると述べる。自然主義的態度では、人間などを含めたありのままの世界そのもの(自然)という対象が設定され、その内部で成り立つ因果関係が探求される。しかし、人格主義的態度では、個々の自我が知る限りでの世界が問題となる。川の流れるは自然主義的態度によれば流体の一種として捉えられるが、人格主義的態度では、魚を釣ることができ、食物を冷やすことができ、道具を洗うことができる場として捉えられる。このように、様々な対象を、それがどのような意味を持つものとして知られているのか、またどのような価値を持つものとして知られているのかという観点から把握することで、諸対象から成る世界を個々の人間にとって知られている世界すなわち環境世界として捉え、さらに他者をそれぞれ独自の環境世界を持つ主体として捉える態度こそが人格主義的態度であると考えられる。

## 2. 動機づけによる人間の理解

人格主義的態度は、フッサールの議論の中では、歴史、社会、文化といった事象に関わる精神科学に従事する者がとる態度として説明されている。だが、それと共にこの態度は、私たちが日常生活の中で相互に関わり合う際にとっている態度であると考えられる。私たちは日常生活の中で、通常は他者を自然の中の一事物とは見なしていない。他者は、単なる観察による認識の対象として存在しているのではなく、話しかけたり、共に作業したり、邪魔をしたり、相談したり、議論したりするといった関係を取り結ぶ相手としてそもそも存在している。他者もまた物的な自然の一部であると考えるのは、むしろ日常的な態度から離れた特殊な態度をとる場合であろう。この人格主義的態度の特徴は、人間の精神や身体を「動機づけ」という観点から理解しようとするところにある。

私たちは、他者の精神を理解したり、その行為の理由を求めたり、自己自身の行為の理由を説明しようとしたりなどする際に、そこで成り立っている諸事物間の物的な因果性を求めるのではなく、「動機づけ」あるいは——やや混乱を招きかねない用語ではあるが——「動機づけの因果性 (Motivationskausalität)」(IV, 216) と呼ばれる法則性を見出そうとする。この点に、人格主義的態度と自然主義的態度との相違がある<sup>2</sup>。

私たちが日常的に行っている人間の精神や行為の理解は、自然における因果関係を知ることによって達成されえない。例えば、大きな部屋で、壁の張り紙に書かれている言葉が光の加減でよく見えないといった場合、私たちは場所を少し移動したり、その紙に近づいたりしてその言葉を読み取ろうとする。その際に、光の反射や感覚器官の反応、移動の際の手足の運動といった事象を、(かなり複雑

であるとはいえ)自然の因果関係によって捉えることは可能であろう。しかし、この行為における物的な事象を詳細に記述したとしても、それは私が自分の場所を変えた理由の説明にはならない。すなわち、「自分にとっては、自分の立っている位置からは、その紙の書かれている言葉が見えにくかった」ということが、私が「自分の場所を変えることにした」ことの理由なのであって、それは事物間の因果関係ではなく、私が持つ知覚や判断といった体験の関係を動機づけの連関として捉えることによって明らかになる。

この動機づけと自然の因果性の理解との相違が、精神科学さらには日常生活において私たちがとる態度と、自然科学においてとる態度との本質的な差異を示している。例えば、精神科学において歴史、社会、文化の研究者が求める説明とは、人々がなぜそうした行動をしたのか、どのような影響を受けまた与えたのか、なぜ協働したのか、といったことである (cf. IV, 229)。そこに見出されるのは自然の因果関係ではなく、ある体験が別の体験に影響を及ぼすという動機づけの関係である。フッサールは、動機づけの例をいくつか挙げている (cf. IV, 230)。例えば、ライオンが脱走したことを知って外出するのを止めるとする。この場合、今私が外出するのを恐れていること理由は、ライオンが脱走したことを聞いたからであり、予めライオンが猛獣であることを知っているからである。また、私が明日の予定をメモ用紙に記入する理由は、私がしばしば物事を忘れがちだと自覚しているからである。その際に、これらの状況において生じている外部の事物からの物理的な刺激や、感覚器官における出来事や、身体における生理学的な過程などが私の行動や判断の理由として理解されることはない。たとえこれらの物理的な要因によって心の状態が生じるということをも認めたとしても、それは行動や判断の理由としては理解されない。むしろ私は、まさに「ライオンが脱走したことを聞いたということ」「ライオンが猛獣であることを知っているということ」「自分が物事を忘れがちだと自覚しているということ」といった理由によって動機づけられているのである<sup>3</sup>。

このように私たちは、自分の行動や判断を説明しようとするとき、事物や身体における物理的な過程の中に見出される因果関係ではなく、行動や判断を動機づけている理由を挙げる。さらに、他者の行動や判断を理解する際にも、他者のうちにこうした動機づけの連関を求めようとする。フッサールの説明によれば、私たちは、「感情移入」によって他者のうちに動機づけの連関を見て取るとき、「なぜ他者がそのように決心したのか」「なぜこの判断を下したのか」(IV, 230)を理解するということになる<sup>4</sup>。私たちは、他者のうちに現在の行動や判断に至る動機づけの理由を見出すことによって他者のことを理解する。人格主義的態度の重要な特質は、この動機づけの把握という自己理解および他者理解の様式のうちに見出される。

こうした見解から、次のことを導くことができる。私た

ちが人間としての他者を見る態度は、単なる物的な事物を見る態度とは異なっている。他者の思考を理解しようとする際に、少なくとも通常の場合には、私たちは他者を動機づける理由を求めているのであり、物理的な因果関係による説明を求めているわけではない。さらに、私たちが人間としての他者の身体を見る際の態度も、単なる物的な事物に対するそれとは異なっている。次に、この身体の知覚の様式に関して、表現の理解と他者把握との類比に関するフッサールの議論を検討しながら考察する。

### 3. 表現としての身体と他者把握

フッサールは、身体と精神、あるいは身体と人格とを別々の仕方では把握される異質なものと見なさない。むしろ私たちは、人間を、身体と精神を併せ持つ「統一的な人間」(IV, 235)として把握する。すなわち私たちは、他者の「身体性一般の類型」「表情の動き」「身振り」「言葉」「口調」などを知覚することを通して、その人の「思考」「感情」「欲求」などを把握する (cf. IV, 235)。ここでは他者の表情はその人の意識の状態を表す「直接的な意味の担い手」(IV, 235)となっている。ここからフッサールは、私たちが他者として把握するものを、「表現」と「表現されるもの」との統一として捉えるという見解を示す (cf. IV, 236)。こうしたフッサールの議論はいかなる洞察のもとでなされているのか。

フッサールが表現と表現されるものとの統一と呼ぶ事態は、まずは言語的表現の理解の場面で見出される。言語的表現には物的な側面がある。だが、例えば文章を読むとき、私たちはそれが書かれている本の紙の頁やインクの跡を見ているわけではない。もちろん、文章が書かれている紙やその上のインクの品質などといった物的なものが特に私たちの興味を引く場合もある。しかし、通常文章を読む場合には、私たちは、紙の頁やインクといった物体ではなく、そこで述べられている内容に着目している。

フッサールは、ここで見出される紙の頁や表紙から成る本という物体と、それが読まれるときに理解される内容とを、物的なものと精神的なものとして区別する。それでは、この状況では、私たちは物的なものと並存している精神的なものへと目を向けているのであろうか。しかし、ここでいう物的なものと精神的なものとの関係に注意しなければならない。私たちは、並んで咲いている花のうち一輪だけに着目するような仕方では、並存する物的なものと精神的なものの中から、後者を選びとって着目しているのではない。言葉や文における物的なものと精神的なものとの結びつき方は、物的なものどうしの結びつき方のような外的なものではない。精神的なものは、物的なものとは「並んで」(IV, 237)いるのではなく、それと「融合した統一体」(IV, 237)であると考えられる。

こうしたことは人間の文化や生活に関連する様々な事物に当てはまる。「グラス、住宅、スプーン、劇場、寺院など」



(IV, 238) は、それぞれ私たちの文化や生活の中で特有の意味を持っている。私たちはこれらを見るとき、まずは何かのための道具や特定の目的のために使われる建物として見る。こうした見方は、これらを単に物的な事物として見る見方とは異なっている。しかし、その際に私たちは物的な事物から目を離して精神的なものへと目を向けるのではない。この場合も、物的なものとの精神的なものとの併存しているのではなく、それらが分かち難く一つのものとなっていると考えられる。このようなあり方についてフッサールは、「この統一は二つのものの結合ではなく、一つのものであり、一つのものだけがそこにある」(IV, 239)と述べている。

このようにフッサールは物的なものとの精神的なものとの一体性を強調する。その主張の要点は、私たちが文章、道具、建物などに接する場合には、まず物的なものに着目し、しかる後に精神的なものを把握するのではなく、一目でそれらを単なる物的な事物を超えた特有の意味を持つものとして、すなわち物的なものとの精神的なものとの融合体として把握するという点にある。

フッサールによれば、これと同様の構造が、他者を把握する場合にも見出される。私たちが他者の発言を聞いたり、他者へと話しかけたり、共同作業したりなどする際には、私たちは決して物的なものとしての身体を見ているわけではない。また、身体と併存するものとしての精神を見ているわけでもない。むしろ、私たちは他者を一目で人間として、すなわち身体と精神との統一として把握している。このような事態についてフッサールは次のように述べる。

「運動し、行動し、話し、書くなどする人間は、心と呼ばれるある事物と、身体と呼ばれる他の事物との単なる連結、結合ではない。身体は身体として、どこまでも心のこもった身体 (seelenvoller Leib) である。」(IV, 240)

私たちが人間を見るとき、その視野には、見る主体の態度によっては物体としても捉えられうる身体が視野に収められている。それは事実だが、しかしその際に把握の対象になっているのは物体ではなく、あくまで人間そのものである。私たちは他者を把握するとき、物的な身体を知覚し、その上で身体の付属物としての精神を把握するのではない。ここではそうした他者把握における「時間的な順序」(IV, 240) は認められない。むしろ私たちは、物的な身体を介して精神を把握すると述べた方が適切である。話したり歩いたりしている他者を、私たちは一目で人間として把握する。そこで私たちが見ているのは物的な身体ではなく精神を体現する身体であり、それはまさに人間の身体である。

他者を「表現」と「表現されるもの」との統一として捉えるというフッサールの見方は、こうした洞察に基づいている。本を読むときには紙に書かれた文字が物的な形態として現出している。だが、私たちはその際に文字そのもの

を主題として把握しているのではなく、その意味を理解している。フッサールの言葉を用いるならば、私たちは意味の理解のうちに「生きている」(IV, 244)。それと同様に、他者を見るときには物的な身体が現出しているが、私たちは物的なものを主題として見ているのではなく、現れている身体に表現されているその人の状態を把握している (cf. IV, 244)。

フッサールがこうした見解において主張しようとしていることは、私たちが実際の生活の中でどのように具体的な事物を捉えているかを振り返ると、より明確になる。人間の生活や文化に関連する事物については、物的な側面と精神的な側面を切り離す方が難しい。グラスやスプーンについての説明を求められたならば、私たちは通常の場合、飲むための器、食べるための食器などといった仕方で、人間の生活や文化の上でそれらが果たす役割を含めて説明する。そうした説明の仕方は一見すると複雑な要素を含み、物的な把握に比べて高次のものであるかのように見えるが、実際のところそれは私たちが日常的に事物を把握する際の標準的な様式である。むしろ、これらの道具をただ物的なものとしてのみ捉え、単に物的な大きさや形状を表す言葉だけを用いて説明するのは見かけよりも困難である。他者の身体に関しても同様で、「踊る」「陽気に笑う」「雑談する」「学問に関して議論する」(IV, 240) などといった多様な身体的振る舞いを、それが私たちに持つ意味を度外視して単に物的な観点からのみ説明するのは、不可能ではないとしてもかなりの労力を要するであろう。このことは、私たちが他者の様子を見て取る時に物的な側面と精神的な側面とを明確に切り離すことが困難であることを示している。

こうした事情を考慮に入れるならば、精神と身体とを異質なものとして確然と区別するという見解は決して自然でも自明でもないことになる。むしろそれは、人間の把握において一つの特異な態度をとる際に浮上する見解であると考えられる。だが日常的な見方に即するならば、精神と身体はそもそも不可分なものとして捉えられており、私たちは身体を人間の身体として把握するとき、すでに精神を体現するものとしてそれを把握していると考えられる。

#### 4. 他者把握と自己把握との関係

こうした見方に基づくと、他者把握 (少なくとも、人間としての他者の把握) は間接的な認識などではないことになる。すなわち、私たちは日常的には、他者の身体を把握した上で、その認識に基づいて他者の精神のあり方を推論するというような間接的な他者把握を行っていない。むしろ私たちは、他者の身体を、そもそも精神を体現するものとして把握しているのである。このように人格主義的態度をめぐる議論を手掛かりとして他者認識の構造を捉え直すことができる。

それでは、自我が自己自身を把握する際の様式について

はどのように考えられるのか。フッサールは自己把握について、「(精神的な意味における)人間の把握のために、私は他者たちの共握を通して私自身に関係する」(IV, 242)と述べる。すなわちフッサールは、私が人間としての自分自身を把握することは、他者を把握することによって可能となると主張する。こうした主張は、私は自己自身の精神を他者のそれとは異なり直接的に確実に把握することができるといった見方と対立するものである。この主張の内実はどのようなものか。

フッサールはここで把握されるべき他者のことを、他の環境世界や私の身体に対する「中心項」、私が彼らを把握するのと同じように私のことを把握し、私自身を社会的な人間として、身体と精神の統一体として把握しているものとして規定する(cf. IV, 242)。そのようなものとして他者を把握することによって、私が自己自身へと関係することが可能となるとフッサールは述べている。ここでは次のようなことが述べられている。まず他者は、私が持つ環境世界とは異なった環境世界を持つ主体である。また、その環境世界には、私の身体も他者にとっての客体として含まれている。そして私は、私が他者を把握するのと同様の仕方、他者によって身体と精神の統一体として把握されている。このように、他者を、私という人間をも客体として含んでいる他者自身にとっての環境世界の主体として把握することによって、はじめて私が自己自身を人間として把握する可能性が開かれるとフッサールは主張している。

その上でフッサールは、私が人間として自己自身を把握する際には、(1)私が内省によって把握する自我と、(2)他者によって表象されている自我、この両者の同一化が暗黙のうちに行われているとする(cf. IV, 242)。すなわち、私が人間としての自己自身について何かを把握するためには、他者が表象する私を必要とするということである。フッサールによれば、この他者による私の表象を介した自己把握によって、私が自己自身を他者に対する自我として理解し、また他者を他者として理解することが可能となり、さらには自己自身を「私たち」の一員として理解することも可能になる(cf. IV, 242)。この自己把握に関するフッサールの主張をどのように理解すべきなのか。

これについては次のように考えることができる。私は、少なくとも日常的には、自己自身のことを人間として把握している。例えば「私は腕に痛みを感じている」と述べる時、私は、その痛みがここにある特定の身体に生じているということ、さらには痛みの程度によっては痛みの感覚は腕を押さえるなどといった身体の振る舞いとして表出されうること、そして他者がそうした身体の振る舞いを目にしたならば、それを介して私の感じている痛みを見て取るであろうことを、すでに暗黙のうちに理解している。そうだとすれば、私にとっても、自分の感じる痛みは、特定の身体の振る舞いや「痛い」という発声などと一体のものとして結びついている。こうした自己自身の理解は、私に対する他者の視線を前提している。より詳細に言えば、私に

対する他者の視線に関する私の理解を前提している。私は他者の身体と精神とを一体のものとして、すなわち人間として見るが、他者もまた同様に私の身体と精神とを一体のものとして見ている。こうした見方が成り立っているときにはじめて、私たちが現に持っているような人間の精神についての理解が成り立つと考えられる。それゆえに、私は決して自己自身の精神に直接的に接近できるわけではなく、むしろ〈私を人間として把握する他者〉の精神の理解を前提して、はじめて自己自身の精神に接近することができるのである。こうしてフッサールの議論からは、人間としての私の自己把握は、自己の内面にのみ目を向けるといった方法によってではなく、むしろ他者把握を暗黙の前提としてはじめて成り立つという洞察を引き出すことができる。

## 結論

フッサールの議論に関する以上のような解釈を受け容れるならば、他者問題はそもそも問題の成立基盤を喪失すると思われる。他者問題は、私は自分の精神の状態に関しては直接的に知ることができるが、他者の精神の状態については間接的な認識しか成り立たず確実なことは分からないという事態を前提として認めることによって成立する。しかし、『イデーニ II』で提示されている議論によれば、私たちは、他者の精神はまずその物的な身体の振る舞いを見た後に間接的に推論されるという考え方を捨てる必要がある。

まず、私たちが人間としての自己自身の行動や思考を説明したり、他者のそれを理解したりする際には、物的事象間に成り立つ因果関係ではなく、体験間の動機づけの連関を把握することが求められる。すなわち、他者の理解においては、そもそも他者の精神において成り立つ動機づけの連関を把握しうることが前提されている。さらに、人間の理解に際しては、身体の振る舞いはすでにそれ自体が精神の表現として受け取られるのであり、私たちは他者の身体を介してそれと直接的に結びついた精神の状態を把握すると考えられる。したがって、他者の身体が直接的に知覚されるのに対して精神は間接的に知られるに過ぎないという見方は成り立たない。そして、自己把握は他者把握とは異なり直接的な知識を与えるという見解についても、自己把握の成立のためには他者の観点が必要であるという洞察を受け容れるならば、むしろ自己把握は他者把握を前提するという点で、他者把握に対して優位性を持つわけではないということが導かれる。

こうした考察をふまえると、少なくとも人間としての他者を把握するという場面においては、他者問題を成立させる前提は成り立たず、他者問題は問題として浮上しないことになるであろう。本稿で検討した諸概念を用いて考察するならば、他者問題の成立基盤は、人格主義的態度と自然主義的態度との混在を機縁として形成されると考えること



ができる。そもそも人間を人間と見なす見方（人格主義的態度）をとっている際には、他者問題は生じない。だが、人格主義的態度で自明なものとして受け取られている精神と身体との一体性は、自然主義的態度による見解が入り込むことによって忘却され、両者はそれぞれ独立した対象と見なされる。さらにこれらの二つの態度の混在が、動機づけにより理解される精神と、因果関係のうちに位置づけられる身体との異質性を際立たせる結果となる。このことを回避するためには、人間を見るときに私たちがとっている態度を捉え直すことが必要となるということをフッサールの議論は示唆しているのである。

しかしこの問題については、さらに検討すべき事柄が残されている。フッサールは、自己把握と他者把握の密接な連関を認めつつも、自己把握を成立させるもう一方の要件として内省の必要性を認めており、また純粋な自己把握には他者から自我がどのように見えるかというような要素は含まれないという見解をも示している（cf. IV, 250）。このように人間としての自我の把握ではなく、純粋な主観としての自我の把握というものが持つ意味を、人格主義的態度をめぐる議論の観点から再度考察し直してみる必要があるだろう。また、他者把握に関しても、フッサールは一方では他者の精神の把握における直接性を強調しながら、他方では他者把握における感情移入の役割についても論じている<sup>5</sup>。こうした見解が正当ならば、様々なレベルでの他者把握における感情移入の内実をそれぞれ明らかにすることも問題の明確化のために必要となる。これらの問題について、フッサールの自我論および他者論の全体像を考慮に入れつつ検討し、またフッサールとは異なった哲学的立場からなされる議論——例えばハイデガーの議論や、分析哲学における自己知論など——とも比較しながら考察していくことが今後の課題である。

## 【註】

フッサール著作集（Husserliana）からの引用箇所の指示は、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示すことによって行った。なお、訳出は基本的に筆者によるものであるが、次の邦訳書をも参照した。立松弘孝・榊原哲也訳『イデーン II-II』、みすず書房、2009年

- 1 ハイデガーは、「感情移入」によって他の人々との共存在が構成されるという考え方を批判し、むしろ感情移入は共存在を前提としてはじめて可能になると主張した。ハイデガーによれば、ある特定の他者の内心を推し量るために感情移入的な理解を試みることは、他の人々との共存在の一つのあり方と考えるべきである。だが、他者の心的生活の理解を問題として設定する際には、そうした特定の他者理解が目されがちであり、結果的にそれが他者への関わりそのものを可能にするものとして受け取られてしまうとハイデガーは指摘する。 Cf. Heidegger, M. : *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1993, pp.123-125.
- 2 自然主義的態度と人格主義的態度との相違は、自我と対象との関係に着目すれば、それを「実在的關係」として捉えるか、あるいは「志向的關係」として捉えるかという相違に結びついている（cf. IV, 215）。自我が自己自身の環境世界に対して持つ関係は、自我というものと諸事物との間に成り立つ実在的關係ではなく、志向的關係である。環境世界における諸事物は、自我に対して、自我の知る限りのあり方において現れる。こうした関係が志向的關係であり、それは自然科学において探求される諸事物間の因果関係のような実在的關係とは異なっている。こうした相違が表面化する場面としてフッサールは次のような例を挙げる。例えば、対象となっている事物が実際に存在していれば、志向的關係と因果関係とは並行するが、それが実際には存在しない場合には志向的關係だけが成り立つ。鈴の音を聞くとき、その鈴が実際に存在していれば、志向的關係においては私たちにその鈴の音が現れており、また実在的關係においては鈴によって空気が振動して自我の感覚器官に到達するという事態が並行している。しかし、鈴の音を確かに聞いたと思ったにもかかわらず、鈴が実際には存在していないというような場合には、実在的關係は成立していないが、こうした場合でも志向的關係は認められる。
- 3 因果関係と動機づけの連関との相違は、それらが認識される仕方のうちにも見出される。フッサールの分析によれば、私たちが事物の知覚において把握する内容は、その事物の現出である。それは、私たちにとっての事物の見え方の一つに過ぎない。それと同様に、私たちが知覚する自然の因果関係もまた、真の因果関係そのものの現出に過ぎないものとして捉えられる。それに対して、動機づけの連関は、物的な事物の関係とは異なり、現出するものとしては捉えられていない。したがって、動機づけに関しては、私たちに知覚される動機づけの背後にある真の動機づけといったものは想定されていない。このように、私たちにとっての現れ方という点においても、因果関係と動機づけは区別される（cf. IV, 230-231）。
- 4 ただし、後述するように、こうした「感情移入」はどのようになされ、他者把握においてどのような次元で貢献するのかということについてはさらに考察が必要である。
- 5 例えば、フッサールは、他者の動機づけの把握のためには感情移入に加えてその人の体験を追体験しながらその人の身にならなければならないと述べている（cf. IV, 275）。こうした感情移入の内実や、種々の他者把握の場面における役割に関しては、さらに考察する必要がある。なお『デカルト的省察』では、様々な段階における他者構成の問題について言及されている（cf. I, 159-163）。